

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 院長 重盛康司 先生



天願先生> この度は、沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 院長ご就任誠におめでとうございます。ご就任にあたっての率直なお気持ちをお聞かせください。また、先生のご出身は東京だと伺ったことがあります、どのような経緯で沖縄で働くことになったのでしょうか。

重盛先生> ご挨拶いただきありがとうございます。正直なところおめでたい気持ちは少ないのですが、院長に就任した以上頑張るしかないと思っています。

私は東京生まれの東京育ちで、最初は東京都調布市にある電気通信大学に進学しました。その後転身し信州大学医学部に進学、3,000m級の山々が美しい信州の高原地帯は避暑地としても人気で、東京にも行きやすく勉強しやすかったです。卒業後は母校の放射線科医局に入局し、学生時代を含め20年余りを長野県で過ごしました。

人生の転機となったのは、初期研修医制度です。臨床研修制度の開始に伴い全国の大学医局で関連病院から医師を引き揚げるという現象が発生しました。これに関連して色々あり、当時所属していた大学の医局を飛び出してしまったのです。大学医局での病院勤務を辞めるにあたり、夫婦で相談し「沖縄に行こう」と決めました。30代後半からスキューバダイビングにハマっていて妻と一緒にダイビングをしていた影響もあったと思います。10月終わりの長野県は炬燵（コタツ）を出して冬の準備を始める季節なのですが、沖縄に移住して暖かいというか亜熱帯そのもの、とても暑いことにびっくりしました。40代前半から沖縄県で暮らして20年弱になります。

こちらに来た当初、長野県ではほとんど見られなかった40代の脳梗塞が現実に起きていることに驚きました。また、カテーテル治療を行う際も、長野県の患者さんに比べ全般的に動脈

硬化が強く、血管の感触がとても厳しく治療がやりにくいという印象を持ちました。沖縄は長寿県と聞いていたのですが、長野県と比較して驚くほど高血圧・動脈硬化・成人病などが進んでいるんだなあというのが実感でした。

天願先生> そうだったんですね。また、院長として、先ず取り組みたいと考えていることをお聞かせください。

重盛先生> 夢のない話で恐縮ですが、現在考えていることは、経営をどうやって立て直すかという、ごくごくシンプルなところにあります。私の役割は、私が院長の間に経営再建を軌道に乗せて、次の院長先生や次の世代の管理職医師たちが今まで通りの病院運営を普通にできるように、内部環境と外部環境を整え直していくことだと日々考えております。

県立北部病院でも管理職としての経歴が長いのですが、南部医療センター・こども医療センターは職員の数は倍以上と規模も大きく、機能的にも高度な部分を担っています。そのため、院長になってから改めて一筋縄ではいかない難しい病院だと実感しています。

特に、こども医療の部分については、副院長の時と比べ責任が重いと感じています。私が院長に就任して実感したのは、当院はこども部門のボリュームが非常に大きいという点です。ベッドの数は全体の約1/4（25%程度）であることに対し、医業収益で見ると約35%をこども部門が占めているほどです。一般的な病院の小児科の経営規模は10%前後ですので、如何に大きいかがわかると思います。

南部医療センター・こども医療センターの運営上の難しいところは、おとな部門とこども部門とが病院内に一緒にあり、運営上の感覚的な標準レベルがそれぞれに異なっていることです。特性が異なる2つの部門が反発し合わないように運営していく方法を、いろいろなバランスに苦悩しながら暗中模索する毎日が続いています。

昨今の経営環境の悪化によって、職員全体が下向きになり、後ろ向きに気持ちが塞ぎやすい



状況があるため、両部門のモチベーションをくじくことなく、未来に向かた歩みを止めずに進めていけるよう、どう導くべきか苦悩し続けているのが正直なところです。

天願先生> 沖縄県南部の中核病院として幅広い医療を担っておられますか、特に“こども医療センター”としての機能を含め、地域において重要な役割を担っていると思います。今後力を入れていきたい小児・周産期医療の課題や目標についてお聞かせ頂けますでしょうか。

重盛先生> 沖縄県の小児医療は、とても難しい状況にあると認識しています。中長期的に見ると、地域で小児科の診療を続けてくれている病院の小児科医の数や勢いが下がりつつあり、当院に期待されるウェイトや診療のボリュームが高まってきていると感じています。

しかし、一極集中では地域医療そのものが成り立たなくなってしまいます。中核病院として、それぞれの病院に対し、温かい応援や上手な連携を呼びかけ、地域の小児科の患者さんたちが困らないよう、リーダーシップを取っていかないといけないと考えています。現場レベルでは連携は行われていますが、院長として本格的に実践していくのはこれからです。

天願先生> 重盛先生が目指す病院運営方針、医療機関等との連携についてお聞かせいただけないでしょうか。

重盛先生> 一般的な話で恐縮ですが、目指すべきポイントは、患者さんから選ばれる病院、そして診療所の先生たちからも安心して患者さんに勧められる病院になっていくことです。

正直に申し上げると、昨年当院で実施させて頂いた地域クリニックへのアンケート結果を見るかぎり、当院はかかりつけの患者さんに対する紹介先として「第一選択となっていない」という一面が見えてきました。クリニックの先生方から患者さんの紹介先に真っ先に名前をあげてもらえるような病院になることが、今私たちが目指すべきところです。

天願先生> ビジョンや人材育成について、どのような構想をお持ちでしょうか。

重盛先生> 当院には、4月から副院長兼母子センター長として戻ってきてくれた中矢代真美先生、そして新生児内科部長兼医療部長の大城達男先生がいて、小児医療を長年バックアップし、また最前線で担ってくれています。こども医療機能を考える上で重要な人材で、ふたりがいてくれる安心感はとても大きいです。

経営規模では大人部門の機能は病院規模に直すと300床程度の通常の総合病院の大人機能規模的な感覚になってしまい、周囲の病院に比べると見劣りしやすいからこそ、彼らを勇気づけ、将来に向けた希望（ロボット手術など）をきちんと持てるように導いていくのがもう一つのテーマだと考えています。経営状態が悪いので将来ビジョンが大切になりますが、病床規模から考えて、がん診療の機能を充実させていくことはなかなか難しいと考えています。

天願先生> 沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

重盛先生> おとな部門もこども部門も、一次救急のところをどうコントロールしていくのかが大きなテーマです。一次救急は、市町村や開業医の先生方のご協力が欠かせないところで、医療センターとしては、医師会の皆様



に相談に乗っていただけるとありがたいと考えています。

開業医の先生方の平均年齢が上がっているという現実がある中で、将来の医療資源をきちんと残していくためにも、お互いの役割分担を考え、住民・患者さんのために、医師会の皆様方と連携し二人三脚でやっていければと思っています。

天願先生> 先生の心構えや座右の銘についてお聞かせください。

重盛先生> 心がけているところは、まず「基本に忠実に」です。基本を外してしまうと失敗しやすいので、どこに基本があるのかを常に考える様にしています。そしてもう一つは「繋ぐ」ということ。私は元々放射線科医として画像診断やカテーテル治療を手がけており、画像診断を通じて内科や外科を繋ぐ役割を担っていました。今は、職員を繋ぐ、あるいは病院の中と外を繋いでいくという役割を任せられていると考えています。

天願先生> 先生の強みをお聞かせください。

重盛先生> 冒頭でもお伝えしましたが、医師になる前、コンピュータープログラマーやシステムエンジニアを目指していた時代があり、前述の電気通信大学に3年ほど通っていました。今となってはこの経験が私の強みになっていると考えています。

信州大学病院時代は、IVR をメインに診療していましたのですが、東京からカテーテル材料メーカーの営業さんに混じって何人か開発エンジニアも来ていました。もともと理工学系にいたという技術的バックグラウンドがあるため、医師がストレートに発する感覚的な言葉が技術畠の人たちには伝わらないという課題に対し、その人たちに「こう言えば多分伝わるだろうな」というエンジニア用語に翻訳して伝えてあげる役割を担うことが出来ていたのかも知れません。「このカテのこの部分をアレンジするとこんな特性に変わるよ」などと話をしていました。

沖縄県に来てからは、県立北部病院で電子カルテを導入する際、予算の制約が厳しかったこと、病院にとってシステム導入時に外部の業者さんにネットワークを握られてしまうと、将来的な利活用を制限されて病院側の自由度が下がってしまうと感じたため、当時40代後半だった私が発起し、院内 LAN を自前で設計しました。ネットワークセキュリティの構築を含め、かなりの業務量・勉強量になりました。電子カルテ導入に伴うシステム構築も合わせ、振り返ると今で言う「リスクリング」になったのかなと思っています。

院長になった今でも院内 LAN の設計や管理は続けており、ネットワークを通じて病院 DX を進め「全国一の DX 病院にしてやるんだ!」という気概は持ち続けています。そう言えば、院内 LAN やコンピューターネットワークも「繋ぐ」ものの一つですね。

天願先生> なるほどですね。ありがとうございます。最後に日頃の健康法や趣味についてお聞かせください。

重盛先生> 特に健康法はありません(笑)

趣味と言えるほどのものではありませんが、車は、メーカーの年齢戦略にまんまとハマってしまい、60歳近くになってスポーツカーを購入しました。国産車ですけどね。大学生の頃は夜な夜な信州の峠道に行きましたが、いまは順々高速道路を往復する毎日ですよ。



PROFILE

学歴・職歴

平成 6 年 3 月	信州大学医学部医学科卒業
平成 7 年 5 月	信州大学医学部附属病院 放射線科医員（研修医）
平成 7 年 12 月	長野赤十字病院 放射線科（研修医）
平成 9 年 4 月	国立松本病院 放射線科 非常勤医師（研修医）
平成 9 年 5 月	同（レジデント）
平成 10 年 6 月	飯田市立病院 放射線科医師
平成 13 年 4 月	信州大学医学部附属病院 放射線科助手
平成 15 年 4 月	国立長野病院 放射線科医長
平成 19 年 11 月	沖縄県立北部病院 放射線科医長
平成 23 年 4 月	同 放射線科部長
平成 25 年 4 月	同 医療部長
平成 28 年 4 月	県立南部医療センター・ こども医療センター 医療部長
平成 29 年 4 月	同 副院長
平成 30 年 4 月	県立北部病院 副院長
令和 6 年 4 月	県立南部医療センター・ こども医療センター 副院長
平成 7 年 4 月	同 院長

天願先生> 本日は長い時間ありがとうございました。今後ともよろしくお願ひいたします。
インタビューアー: 広報委員 天願 俊穂